

実際、私たちの周りにも性的マイノリティーは存在する。ゲイ男性であるヒロキさん。彼は慶應義塾大学未公認の性的マイノリティーサークルである、LGBT三田会に所属している。同サークルではカミングアウトをする人もしない人も一緒にボーリングや食事を共にするなど日々楽しく活動している。

彼は、中高のときと比べ、大学では自身がゲイであることをカミングアウトしやすくなったと明かす。中高時代特有の密な人間関係とは異なり、大学は人と人とのつながりが薄く、気まずさを感じてもコミュニティから逃げられる環境があるからだ。多様な価値観があり、教養があることも打ち明けやすさの理由であると話す。

ヒロキさんはLGBT関連の法整備については好印象を持っており、これをきっかけに相続権の認可などさらなる権利向上につながればと考えている。今後死後の相続なども認められるなど進んで欲しいと考える。しかし、法整備は彼が考えるところの複数の人との関係を楽しむというLGBTの文化と相反するものではないかとも感じている。結婚を考えないために、法整備を必要としない人もいるのだ。性的マイノリティーの中にも様々な意見があるということだろう。ヒロキさんは多様な性が存在することを認知したその先に、統合があると考えている。多様な意見をもつ多くの当事者がいるなか、ヒロキさんのように、客観的かつリアリスティックに日本におけるLGBTの成り行きを見据える当事者もいるようだ。

「学問と一緒にまずは分析しなければならない。その先にLGBTとストレートの統合があると考えています。」

どうすれば92.4%の人がLGBTの問題に関心を持つのか。それは、92.4%の人が性的マイノリティーの人とつながっている意識、つまり性的マイノリティーが居るからこそ92.4%の人に対して利益や不利益が生まれる関係性があることが理想ではないかと私たちは考えた。性的マイノリティー以外の人にはLGBTの問題に対して関心を持たなくても平然と生活ができる。しかしだからと言って性的マイノリティーの人々を完全に無視することは無責任である。性的マイノリティーの権利が拡大し、様々な選択肢が増える住みやすい社会になって欲しいと願う人達は確実にいる。そういった社会の実現にはマジョリティーがいかにLGBTの問題に関心を持ちの認知を広げる活動に貢献できるかであろう。